

神奈川県教育長賞

「わたしだけのお米」

横須賀市立鷹取小学校
4年 青野 芽生

わたしがいつも食べているお米はどこにも売っていません。なぜなら、おじいちゃんを作っているからです。わたしは生まれてから十年間、おじいちゃんのお米を食べて大きくなりました。そのおかげで、かぜをひいたりして学校を休んだことは一日もありません。

お米作りは、いねとよばれるなえを植えるところから始まります。今年のゴールデンウイークにおじいちゃんの家遊びに行くと、田んぼには植えられたばかりの小さないねが風にゆれ、そのまわりをカエルが気持ちよさそうに泳いでいました。

そして夏休み、ひさしぶりにおじいちゃんといっしょに田んぼに行くと、いねは三、四倍に大きくなり、いねの先にはお米のもとになる「ほ」がたくさんついていました。わたしは、のびるのがなんて早いのだろうとおどろきました。

おじいちゃんは、おいしいお米をしゅうかくするために毎日、何回も田んぼを見回ったり、イノシシに食べられないように、ふれたら電気が流れるさくをたてたりと気をつけています。

おじいちゃんにお米作りのくろうを聞いてみると、田んぼのまわりの草かりが大変だと言っていました。草がのびると悪い虫がきていねにがいをあたえたり、草にえいようをとられて、いねの生育をおさえってしまうので、お米をしゅうかくするまでに四回から五回は行う必要があります。夏の暑い日にはあせでびっしりになるそうです。

でも、たくさん手間をかけることで、いねがだんだん大きくなっていく様子を見ると、それまでのくろうがふきとび、うれしい気持ちになると話してくれました。

秋になると、いよいよよしゅうかくの時期をむかえます。「ほ」が実って重くなり、今はまだ緑色のいねも黄金色に変わります。おじいちゃんがお米作りをしていて一番よろこびを感じるしゅんかんだそうです。

わたしはお米を食べる時、いつもおじいちゃんのことを思い出します。おじいちゃんがくろうして作ってくれたお米は一つぶもむだにできません。

そして、そのお米でお母さんが作ってくれるごはんがわたしは大すきです。家族そろってごはんを食べながら、その日にあった楽しかったことを話すとみんなが笑顔になります。悲しいことがあった日は家族に話を聞いてもらおうと安心して元氣になります。わたしにとってごはんの時間はとても大切です。

今年ももう少しするとおじいちゃんから、新米がとどきます。「大事においしく食べてほしい。」というおじいちゃんの思いがつまっている特べつなお米です。おじいちゃんのうれしそうな顔を思い浮かべながら、家族みんなで食べたいと思います。